

話し手・聞き手が相互に作用し合う姿を目指して

1 国語科における「一人一人が問いをもち追求する姿」

子どもたちはこの学校園で過ごす11年間の間に、非常に多くの言葉を手に入れ、それらを使って自分に必要な情報を得たり、自分の伝えたいことを相手に伝えたりするようになる。幼稚園で、遊びや生活の中から多くの言葉を獲得した子どもたちは、小学校に入学すると授業の中でそれを用いながら、さらに多くを獲得していく。身に付けた言葉を使って周りの人々に伝える思いや考えも、だんだんと複雑なものになっていく。時には厳しい言葉で相手を傷つけたり、傷つけられたりすることもあるだろうが、友だちの温かい言葉によって勇気付けられることもあるだろう。言葉は子どもたちにとって、とても重要なコミュニケーションの手段であるといえる。一方で、言葉は思考のための手段でもある。子どもたちがこの学校園を巣立った数年後、一人の社会人として生きていくためには、豊かな言葉を身に付け、物事を自分でとらえ、自分で追求し、自分で決定できることが必要不可欠となる。それを実現するためには、言葉を単なる知識や技術として獲得するだけでなく、その場にあった言葉を選び、自分の目的に応じて使い分けることのできる主体的な言葉の使い手になっていくことが望まれる。

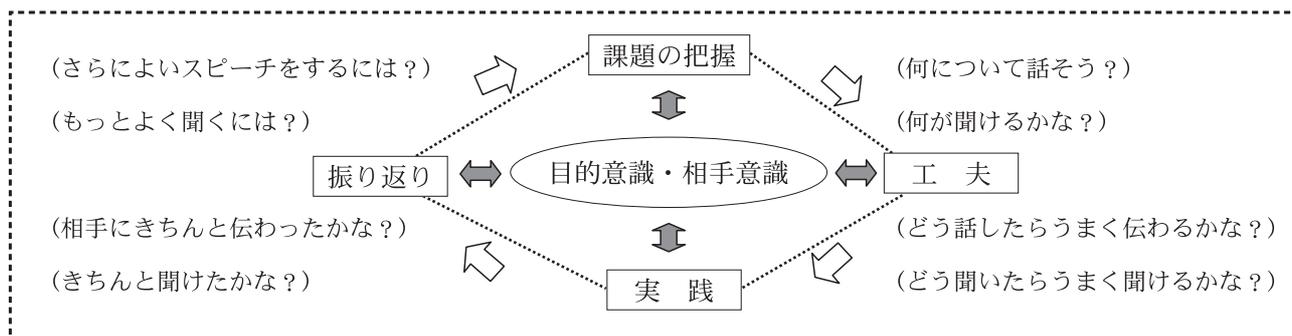
本学校園国語科では、研究主題「学び続ける子どもの育成」を受け、この言葉の学習を「話すこと・聞くこと」を中心に据えて進めていく。「学び続ける」ためには、子どもたち一人一人が主体的に問いをもつことが必要である。もちろん「読むこと」や「書くこと」でも問いをもつことはあるが、「相手」が常に存在する「話すこと・聞くこと」の学習では、そこに具体的な「相手」がいることにより、子どもたちがより多くの問いをもつことが可能だと考えたためである。何を伝えたいかという「目的意識」に加え、相手のことを考えて自分の言動を決めていく「相手意識」が、より深い「問い」を生むことにつながり、その経験を積み重ねることで、子どもたちの言葉の力は高まっていくであろう。

本学校園国語科では、「話すこと・聞くこと」の学習を行うときの「一人一人が問いをもち追求する姿」を次のように考える。

○何をどのように伝えたり話し合ったりすればよいか、見通しをもとうとしている姿

○伝え合ったり話し合ったりしたことを振り返り、自分や他者の選んだ方法・手段について吟味する姿

これをスピーチを例にして考えると、子どもたちの中に次のような「問い」が生まれてくることが考えられる。



このように、「目的意識」と「相手意識」を中心に置き、常に「何のために」「だれに」ということを意識付けることで、自分の話す力・聞く力を高めるための問いが繰り返されることになる。

2 「一人一人が問いをもち追求する姿」を求めて

(1) 発達段階を踏まえた単元構想

本学校園国語科では、子どもたちの「話すこと・聞くこと」についての発達段階ごとの特徴を次のように考え、単元を構成したり、学びを見取るための指標としたりする。

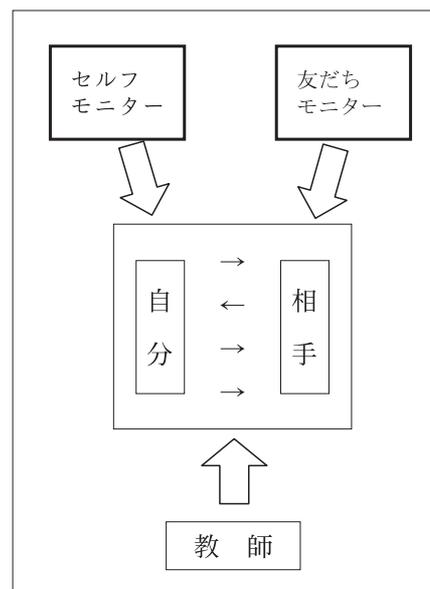
初等部前期（幼～小2）	互いに伝え合うことを楽しむ段階
初等部後期（小3～小5）	目的意識をもって伝え合い、課題を追求しようとする段階
中等部（小6～中3）	課題の追求のみにとどまらず、思考の深まりが生み出される段階

(2) より効果的な学び合いをつくる学習活動、学習形態

「話すこと・聞くこと」には非常に多くの学習活動が存在する。発達段階に応じて系統的にそれらを組み立てていく必要があるが、子どもたちが新鮮な気持ちで取り組むことができるような点について工夫する。

- リアリティのある場の設定（目的、場面、相手）
- 様々な学習形態（ペア、トリオ、グループ等）
- よりよく話すための工夫の言語化
- モニタリング（セルフ・友だち）

子どもたちが「話したい！聞きたい！」という気持ちになるための場の設定はもちろんのこと、学習形態についても発達段階や学級の状態に応じて柔軟に考えていきたい。また、相手のことをどのように考えてどんな工夫をしたのか、メモを作るなどして言語化できるようにしておきたい。子どもたちは自分の伝えたいことを自分なりの工夫をもって相手に伝え、相手の反応をもとに少しずつ言葉の力を高めていくものと思われる。しかし、それだけではより高い「問い」を求め続けていくには不十分である。自分の話す姿・聞く姿を実際に見聞きすること、周りの子どもたちの声を示すことで、自分が思ったように話せていたか検証できる場をもちたい。そして、「本当にこれでよかったのだろうか。」「こんな場合は考えられないか。」などという教師のはたらきかけを工夫することで、子どもたちの考えをさらに深めていきたい。



(文責 永野 信吾)